



かなこさ〜ん！

タクシーから降りた三人に、よく日に焼けた女の子が手を振りながら走り寄ってきた。

静岡県、清水市。

徳川家康の眠る久能山のふもと。

長く続く海岸線の向かいには、街道沿いに石垣苺の農園がそこかしこあった。

「みどりちゃん、久しぶり！ すっかりいいオナナになっちゃったね」

「『なっちゃったね』はヒドいなあ〜」

「ふふふ、ゴメンゴメン」

「皆さんもお元気そうで」

佐野碧はゆっくりと両手を前に揃えておじぎをした。

「あれ？ みどりちゃん、その手…」

「すごいでしょ。義手、電動式のに換えたんだ。チョットでも動いてくれないと人手が足りなくて」

「ヨシオがいるじゃない」

「ゴリラと超人ハルクの組み合わせよ。事務はワタシがやらなきゃ。二人とも数字はてんでダメだからさ」

「大変そうね」

「うううん、毎日楽しい、すごく」

目をキラキラさせながら話す碧を、加夏子は眩しそうに見た。

「いきましょう。みんな待ってますから。みーちゃんもおっきくなったね、おねえちゃんと競争する？」

「うん、する！」

「じゃいくよ、よ〜いドンッ！」

すらりと伸びた肢体を弾ませ、碧が走り出した。

猪のような影が慌てて後を追いかける。

「…あの子、まるでウリ坊ね」

「うふふっ」

「わたしたちも行きましょう」

少ない手荷物を持って、二人はゆっくりと歩き始めた。

◇

「おお、来たきた！ あがってくれ」

開けはなった玄関から、銀さんの威勢のいい声が響いてきた。

「みどり、裏の井戸に苺が冷やしてある、とってきてくれ」

「はーい」

「おっと、おチビもきたか！　すごい汗だな」

「おチビじゃないやい！　清水美幸だい！」

「ハハ、じゃ美幸お嬢様、こちらでお汗をお拭き下さいな」

むっとする顔ごと頭からタオルを被せた銀さんは、サンダル履きで玄関から出てくると二人の前に立った。
ゆっくり加夏子と…そして紗季子と視線を交わす。

「元気そうだな」

「おかげさまで。久我さんも元気そうね」

「俺あすっかりジジイになっちまったよ。御主人の葬式に行けなくて済まなかった。あの頃はまだ農園を軌道に乗せるのに必死でな」

「もう2年も前の話よ。それより美味しい苺を御馳走して」

「ああ」

三人は屈託無く笑った。

◇

「彼は相変わらずなのか」

風通しのよい六畳間。

質素な和室の卓袱台を囲んで、苺を頬張りながら銀さんが聞いた。

「ええ。よく眠ってます」

世間話のように加夏子は答えた。

「顔色もいいんですよ。すこしふっくらしてきたし」

「昏睡状態の患者ってのは痩せてくもんだ。太るってのはいい兆候かも知れんな」

「父が亡くなった年に2回目の骨髄移植をしました。それも良かったのかもしれませんが」

「ドナーは？」

「烈さんです」

「あいつ、今も戦場にいるんだろな」

「あの人は殉が目覚めるまで絶対に死なない。そんな気がします」

「美幸ちゃんは小学校4年生だったっけ」

「ええ。いつの間にか大きくなりました」

「やんちゃな年頃だ、しつけも大変だろう」

茶を啜る銀さんが紗季子を見た。

「危なっかしい位に元気だけど、とても優しくていい子よ。加夏子と殉さんの良い所をちゃんと半分づつもらっているみたい」

紗季子がうっすらと目を細めた。

「まるで昔の碧だなあ」

アタシがどうしたって？

奥から碧が大きな声で聞いた。

「なんでもねえよ！ いいオンナになったって噂しただけさ」

やだあ、銀さんのバツカア～

後で海岸を案内してやんなど台所へ声をかけてから、銀さんは次の苺に手をつけた。

◇

碧に連れられ加夏子と美幸が出かけたあと、紗季子と銀さんは差し向かいで苺を摘んでいた。

「…随分、経ったわね」

「そうだな」

「ギン、楽しい？」

「ああ。サキは？」

「楽しいわよ。このままおばあちゃんになって、あの人の所へ逝く。怖いけど、楽しみでもあるな」

「おまえらしいよ」

「ギンも結婚すれば判るわよ。穏やかに色々なものがサラサラ薄れてく。それが心地いいの」

「…」

「どうしたの？」

「俺にも判るかもな、サキの気持ち」

「え？」

「嫁さんもらうんだ、オレ」

「ええ！？ 相手は？」

銀さんが黙って海の方を指さした。

暫くの間、紗季子には意味が判らなかつた。

「あなた…まさか…」

「歳、離れ過ぎだよなあ〜」

ポリポリと銀さんが頭を搔いた。

「…あなたってひとは…」

アングリと口を開けた紗季子は、次の瞬間、腹を抱えて大笑いし始めた。

笑い過ぎた目から涙がこぼれた。

◇

みどりちゃん…今、なんて…

「ワタシ銀さんのお嫁さんになるの」

潮風に吹かれ、髪をなびかせた碧が言った。

「本気？」

「うん。ここで銀さんとヨシオと三人で苺を作って、子供も産んで、お母さんになって、いつかおばあちゃんになるって。決めたんだ」

「そうなんだ。びっくりしたケド、おめでとうって言えばいいのかな」

「ありがとう。私、加夏子さんみたいなお母さんになりたい」

「私…ワタシは…」

加夏子は水平線へと視線をさまよわせた。

◇

都内の某病院。

開けはなった窓から微かな風が吹き込んでいた。

眠り続ける男のベッドを、看護師がいつものように直していた。

「堀川さん、枕、取り替えますよ」

そっと頭を持ち上げようとした彼女の手が不意に握られた。

「!？」

「…か…な…こ…」

「堀川さん、聞こえるんですね？ わかりますか！？ 堀川さんっ!!!」

看護師は握られた手を引き剥がすと傍らのナースコールを押した。

誰か出てっ！

先生を…九十九先生を呼んで、はやくっ！

返事が聞こえるまで、彼女はボタンを押し続け叫び続けていた。

◇

碧と美幸が手をつなぎ、延々と積まれたテトラポット沿いに歩いてゆく後ろを、少し離れて加夏子は歩いていた。

碧の笑顔が眩しかった。

加夏子のような母親になりたいと言った言葉が胸に痛かった。

待つのに慣れた。

それでも時々、殉の声が聞きたい、聞かせてと叫びだしたくなった。
美幸がいなければ耐えられなかったかも知れない。

こんなに光が溢れてても
さみしいよ
じゅん

その時ふと誰かが触れたような気がして、加夏子のはっと振り返った。
柔らかな風が、懐かしい気配を運んでくるのを感じた。

…そう…

やっとおきたのね
わたし、すぐいく
とんでくから
まってて

立ち止まり、何かを抱くように両肩をかかえ俯く加夏子を心配した二人が駆け寄ってきた。

「どしたの、どっかいたいの、ママ？」

顔をあげ、涙を拭いながら加夏子は抱きついてきた美幸の頭を撫でた。

おねぼけさんが、やっとおきたよ
会いに行く？ パパのところへ

キョトンとした美幸が、やがてニッコリ笑うと加夏子に抱きついてきた。

日差しはもう眩しくなかった。

(了)